

季刊

唯物論研究協会編集

思想と現代

1985

2号

特集

戦後四〇年と知識人

戦後、啓蒙主義の危機と再生の問題……吉岡保俊
大衆社会論を越えて……矢澤修次郎

社会問題の領域と「モン・ゼ」論……小川晴久
「ポスト・モダン」と唯物論……浦地 実
戦後思想と「ポスト・モダン」

新原道信／桃井健／村田常一／浦地実

〈研究ノート〉
ナシヨナリズム再考……湯川和夫

〈三ユー・カレント〉
〈権威主義的ポジュリズム〉……加藤哲郎

白石書店

季刊 思想と現代

1985年7月

第2号

唯物論研究協会編集

白石書店

目次

特集 戦後40年と知識人

- 戦後“啓蒙主義”の危機と再生の問題……………吉田 傑俊 2
大衆社会論を越えて——知識人と大衆の弁証法—— ……矢澤修次郎 18
社会問題の領域とコモン・センス論……………小川 晴久 33
——戦後における古在由重氏の仕事——
〈ポスト・モダン〉と唯物論……………浦地 実 46
《座談会》戦後思想と〈ポスト・モダン〉 ……古茂田宏・新原道信 63
桃井健・村田常一・浦地実

ぶっく・えんど

- 「欲望」の現在……………古茂田 宏 82

研究ノート

- ナショナリズム再考——福沢諭吉と大川周明—— ……湯川 和夫 86

ニュー・カレント

- 〈権威主義的ポピュリズム〉をめぐって……………加藤 哲郎 98

書評

- 仲本章夫著『理性の復権』……………梅林 誠爾 108

- 新時代工房制作『喫茶店のソクラテス』……………中村 行秀 109

第3号(次号)からの誌名変更について/編集後記
装幀 フレッシュ・アップ・スタジオ・渋川泰彦

New Current

〈権威主義的ポピュリズム〉 をめぐって

加藤 哲郎

1 ポスト福祉国家期の政治状況と国家

ここでとりあげるイギリスにおける〈権威主義的ポピュリズム〉をめぐる討論は、筆者がかつて紹介・整理した「マルクス主義国家論ルネサンス」の一環であり、その今日的展開の一つである。そこで具体的に表象されているのは、一九七九年に政権についたサッチャー首相の統治、特にそのイデオロギー的側面である。この意味では、主としてフランスの経験からひきだされたニコス・ブーランツァスの〈権威主義的国家主義〉、西ドイツのヨアヒム・ヒルシュによる〈フォード主義的安全保障国家〉、アメリカのバートラム・グロスのいう〈笑顔のファシズム〉などと同一次元に属し、「新自由主義」「新保守主義」あるいは端的に「サッチャーリズム」「レーガノミクス」などと呼ばれるポスト経済成長期・ポスト福祉国家期の政治に係わるものである。無論それは、ある程度の修正を加えるならば、わが国の「臨調行革」や「民間活力」「自立自助」論の台頭、あるいは「新中間大衆」や「分衆」の問題とも、つながりうるものである。

〈権威主義的ポピュリズム〉概念は、社会学者スチュアート・ホールにより、一九七九年十月の『マルキシズム』

トッデー』誌上の論文で提起されたもので、後に論集『サッチャーリズムの政治』に収録され、多くのラディカルな社会学者たちにより援用・言及されている⁽²⁾。ホールの最も端的な規定によると、それは「古典的ファシズムとは異なり（すべてではないが）大部分の形式的代表制度をしかるべく保持しながら、同時にそのまわりに能動的な民衆的合意（an active popular consent）をくりあげることができる。資本主義国家の「例外形態」である。その背景にあるのは、世界資本主義システム内でのイギリスの構造的衰退、ケインズ主義的福祉国家の崩壊、社会民主主義的労働党政権の失敗、政労資の「ネオ・コーポラティズム」の機能不全、そこにつけこんだ急進右翼の台頭、世界的な「新冷戦」の巻きかえし、総じてグラムシが「有機的危機」とよんだ性格の資本主義国家の危機であり、危機への右からの応答である。その特徴をなすのは、「家族」「個人」「人種」「規律」「義務」といった反集産主義的・道徳主義的言説と、「社会的市場価値」を唱え「新自由主義」的に社会保障・公的福祉領域の削減・再私化をすすめ外国人労働者や社会的弱者のきりすてを強行しながら、「小さな政府」とは裏腹に「法と秩序」や「国益」の言説で警察力・軍備は増強する権威主義的抑圧との結合Ⅱ「自由市場／強力な国家／鉄の時代」である。しかも重要なこ

とは、サッチャーの「ポピュリズム」的言説が、七九年選挙やフォークランド紛争後の八三年選挙で、労働者階級を含む広範な民衆の支持を実際に獲得していることである。労働組合や左翼へのむきだしの敵意が、長い労働運動の伝統をもつほかならぬイギリスで政治的喝采を得「反動的コモンセンス」を組織している——このことが、ホールをして「権威主義的ポピュリズム」概念を提起させた。

ここではイギリス政治の現実過程にはたちいらぬ。「戦後危機国家」から、アメリカ帝国主義の「ヘゲモニー」とケインズ主義的国家介入により未曾有の経済成長を経験した「経済成長国家」段階をへて、オイル・ショックと一九七四～七五年恐慌を機に「過剰民主主義」「財政危機」をテコとした「危機管理国家」段階に入った、アメリカ、イギリス、西ドイツ、日本など発達した資本主義諸国の比較国家分析も興味深いテーマだが、ここでは省略する。ここではただ、ポスト成長国家、ポスト福祉国家期の保守主義的国家再編を「権威主義的ポピュリズム」概念でとらえようとするイギリス・マルクス主義者たちの問題関心と方法意識のみを、問題にしてみよう。

ホールの発想は、明らかにグラムシに由来する。特にその、「トランスフォルミズム」「受動的革命」「シーザーなきシーザー主義」など「旧いものは死に瀕しているが、新

しいものは生まれてこない」局面での国家と社会の権威主義的再編を示す諸概念が、「ヘゲモニー」「陣地戦」との係わりで参照される。ホブズボームの表現を借りるならば、「世界資本主義の危機は一九三〇年以來もっとも深刻な危機に陥っている」のだが「一九三〇年代と違って、今日左翼は、危機のない代わるべき社会へソ連がそう思われたように」を指し示すことも、短期間に危機を解決することをおおいに約束した具体的政策（ケインズ学派や同種の政策が当時約束したと思われたように）を示すこともできない」ような西ヨーロッパ左翼の閉塞状況が、グラムシの危機分析を想起させるのである。

だが、〈権威主義的ポピュリズム〉概念には、より直接的な二つの理論的源泉がある。一つはプーランツァスの〈権威主義的国家主義〉概念であり、いま一つはラクロウの〈ポピュリズム〉研究である。すなわち、プーランツァスは、遺著となった『国家、権力、社会主義』⁽⁵⁾のなかで、「自由主義国家が資本主義の競争段階と関連し、介入主義国家がさまざまな形態をとりつつ独占資本主義の先行諸局面と関連を有するのと同じように、まさに権威主義的国家主義は、支配的諸国における帝国主義および独占資本主義の現局面に照応しているように思われる」として、「庇護者国家もしくは福祉国家の神話の廃墟」のなかから「国家

の危機」との係わりで生じてくる、「全体主義」とは異なる「権威主義的国家主義」Ⅱ「現局面におけるブルジョア共和政の新たな〈民主主義的〉形態」を見ていた。それは、「政治的民主主義の諸制度の決定的衰退、およびいわゆる〈形式的〉諸自由——これらが失われつつある今になって、「左翼により」その実質性が認められている——に対する厳格かつ多様な制限と連接した、国家による経済Ⅱ社会活動の諸領域全体に対する独占の進行」として先進資本主義国家の一般的特徴づけとされており、サッチャー政権のもとでの〈法と秩序〉的反動化、国家機構の権威主義的再編をも示唆したものとして、イギリス・マルクス主義者に受容された。しかし、プーランツァスが、その分析を「国家行政の不可抗的上昇」に集中したのに対して、ホルが注目したのは、この概念に欠けている（と彼が考えた）国家による民衆の合意調達のメカニズムである。そこで参照されるのが、グラムシの「ヘゲモニー」概念がイタリヤの歴史過程で具体化された「革命と復古の弁証法」「受動的革命」「トランスフォルミスモ」「倫理的国家」などであり、ラクロウのオリジナルな〈ポピュリズム〉研究とその延長上にある〈階級闘争〉とは種差的な〈人民・民主主義闘争 (popular-democratic struggles)〉の概念である。

2 〈言説／審問〉理論と〈ポピュリズム〉

エルネスト・ラクロウの名は、わが国では、その「生産様式の接合」論やミリバンドリブーランツァス論争への介入によって知られているが、彼の『マルクス主義理論における政治とイデオロギー』（一九七七年）のオリジナルな仕事には、その副題「資本主義・ファシズム・ポピュリズム」に示される、ファシズムやポピュリズムのイデオロギイ的研究が含まれていた。国家論上でのラクロウの一つの問題提起は、「階級」の位置する「生産様式」レベルと、諸生産様式の「接合（articulation）」のうえに政治的イデオロギー的諸闘争と国家が位置する「社会構成体」レベルとを、厳密に区別したことであるが（単純なことだが、一つの社会構成体内にはいくつかの生産様式が共存しうるが、国家は通常一つである）、その〈ポピュリズム〉研究においてラクロウは、ナショナリズムやポピュリズムを「階級」に還元・帰属させがちな従来の諸研究を批判的に総括し、ラテン・アメリカのペロン主義などのポピュリズム運動を実証的に検討したうえで、「人民／権力ブロック（people／power bloc）」の矛盾から生じる〈ポピュリズム〉を、「人民・民主主義的な審問（interpellation）概念」

として再措定した。

〈ポピュリズム〉は、ナチズムにも毛沢東主義にも用いられ、一九世紀ロシア・ナロードニキのように農民のイデオロギーとしても表現される。北米では都市化と資本主義化へ反抗する小農イデオロギーと特徴づけられるが、南米では都市小ブルジョアジーのイデオロギーとしても民族ブルジョアジーの反帝主義イデオロギーとしても動員される。ナショナリズムは、ビスマルク・ドイツで封建領主に、革命後のフランスではブルジョアジーに、中国革命では社会主義にさえ結びついた。これらに共通する特徴は、その社会的基盤や階級的「内容」ではなくむしろその「形態」であり、イデオロギー的政治的レベルで諸階級がそれを「接合」することにより、階級対立を「中立化」することである。それは、「人民的伝統」と結びついてくりかえし長期にも現われるから、「近代化」論や単線的「唯物史観」が想定するような「過渡的」ないしは「小ブルジョアジーの」イデオロギーでもない。したがって、（一）『人民』と権力ブロックとの矛盾は、その了解可能性が生産諸関係に依存するのではなく、ある特定の社会構成体を構成する政治的イデオロギー的支配諸関係の複合に依存する、敵対である、（二）「生産様式レベルでの支配的矛盾が階級闘争の固有な領域を構成するとすれば、具体的な社会構成

体レベルでの支配的矛盾は人民・民主主義闘争の固有の領域を構成する」。(三)「しかしながら、階級闘争は人民・民主主義闘争に対して優位するので、人民・民主主義闘争はただ階級的プロジェクトに接合されてのみ存在する。しかししるがえていえば、政治的イデオロギーの階級闘争は、非階級的諸審問・諸矛盾によって構成される範域上に位置するため、階級闘争は、これらの非階級的諸審問・諸矛盾との接合のための敵対的プロジェクトによってのみ成り立つのである。」

この視角からすれば、「民主主義」も諸階級によりあらそわれる「人民・民主主義的」審問の構成要素であり、マクファーソンが明らかにしたように「自由主義」とも「社会主義」とも「接合」可能である。そこで『『人民的伝統』は、階級諸矛盾とは区別される、『人民』と権力ブロックの諸矛盾を表現する、諸審問の複合を成す』「諸階級は、彼らの言説(discourse)の中に人民を接合することなしには、彼らのヘゲモニーを主張することはできない。そして、ある階級が権力ブロック全体と対決しようとする場合の、そのヘゲモニーを主張するための接合の固有の形態が、ポピュリズムである」と述べ、「支配階級のポピュリズム」と、「被支配階級のポピュリズム」を区別し、前者が人民的審問(例えば人種対立)の革命的ポテンシャル

を「中立化」させるばかりかある限界内で「発展」させようとするのに対し、後者は民主主義的審問に内在する敵対を自己の階級的言説に接合し最大限の融合をはかる、したがって「社会主義的ポピュリズム」は労働者階級のイデオロギーの「最も遅れた形態」どころか「最も発達した形態」であり、「社会主義においては『ポピュリズム』の最高の形態と階級諸対立の究極的で最もラディカルな解決とが一致する」とする。

ホールが注目したのは、ラクロウの〈言説／審問〉理論であり、「支配階級のポピュリズム」の論理をグラムシの「民族的人民的次元」「コモンセンス」の分析と理論的に「接合」することにより、これをサッチャー主義に援用することであった。ただし、ホールはラクロウの基本理論を容れながらも、「ポピュリスト的」言説と「人民・民主主義的」言説を区別し、前者を「支配階級のポピュリズム」に、後者を「被支配階級のポピュリズム」に連関させる。つまり、グラムシの「受動的革命」から学ぶべきは、「伝統」の根強さとその保守性が主として支配階級の諸実践に審問に効果的にくみこまれうることであり、サッチャーの言説が、社会民主主義に「上からの受動的革命」への民衆の失望を利用しながら「国家主義」「官僚制」「社会民主主義」「しのびよる集産主義」などを攻撃して否定的極

に追いやり、「所有的個人」「個人のイニシアティブ」(丸)「自由」などの言説を前面に出して肯定的に据えているのは、階級対立を「中立化」するばかりでなく、急進右翼の「下からの受動的革命」の性格をも帯びた「ポピュリズム」だからである、というのである。この観点からホールは、「法と秩序」「コモンセンス」「道徳性」「福祉」「家族」「人種」などの領域でのサッチャーの言説／審問の、「ポピュリズム」的にして「権威主義的」な性格を抽出する。

3 〈新自由主義〉〈新保守主義〉〈新右翼〉

このホールの見解に対して、八四年秋の『ニュー・レフト・レビュー』誌上で、ポブ・ジェソップらが批判を加えている(丸)。批判は大きく三点になる。第一は、「権威主義的ポピュリズム」というタームそのもののあいまいさであり、ホールが時にその「権威主義的」側面を強調し、また時には「ポピュリズム」的側面を強調することにより、また、「上から」にも「下から」にも同じ概念が両義的に用いられることにより、分析概念としては無意味化していく。第二は、その「イデオロギー主義」であり、「言説・理論アプローチ」がサッチャー主義の民意動員、典型的には

マス・メディアとイデオロギーの分析に集中しがちで、その経済的基盤や国家機構の編成などの具体的分析がおろそかにされがちなことである。第三に、その結果、このアプローチではしばしばサッチャーリズムが「一枚岩の怪物」として描きだされ、その内部矛盾・試行錯誤の性格が捨象されてしまうことである。ジェソップらは、そこで、ジェソップ『資本主義国家』で示されていた方法論を用い、サッチャー主義を、「ケインズ主義的福祉国家」が「議会制的代表」でも「コーポラティズム的(機能的)代表」でも正統化しえなくなった「イギリス国家の二重の危機」のもとで登場した、これまでの多面的水平的諸階層をすべてとりこむ「一つの国民」戦略から、国民を「生産者／寄生者」を軸に「富者／貧者」「被雇用者／失業者」「東側世界と西側世界」などの二分法で一面的垂直的に分断しその対立性をおおいたてる「二つの国民」戦略への転換として、位置づける。そこには、シティII金融資本、CBIII産業資本など権力ブロックを構成する資本諸分派との関係でも、諸政党・労働組合との関係でも矛盾が内在しており、「権威主義的ポピュリズム」は、イデオロギー的領域での「コモンセンス」「政治的論題」「ヘゲモニー的企図」「蓄積戦略」「選挙イデオロギー」などに分節化して内在的に分析され、そのうえで政治的・制度的分析により補われなければ

ばならない、とする。無論それは、政治変革の展望とも係わってくる。

こうした視角からすれば、「一つの国民」か「二つの国民」かという「イデオロギー的企図」レベル以外でも、サッチャーリズムの注意深い内在的分析が必要となる。この点で示唆的なのは、ラクロウの共同研究者でグラムシ研究で知られるシャンタル・ムーフェの「民主主義と新右翼」と題する論文である。彼女は、今日のイデオロギー状況を、〈自由民主主義〉に内在する「自由主義」と「民主主義」の矛盾が危機のもとで顕在化し再編されたいうえでの、〈自由保守主義〉の台頭ととらえる。支配イデオロギーとしての〈自由民主主義〉は、「福祉国家」のもとではさしあたり市場メカニズムの保護・促進を意味する「自由主義」と社会的平等・政治的参加を意味する「民主主義」との潜在的矛盾を「中立化」させることができたが、危機に直面して「新しいコモンセンス」を創出しようと〈自由保守主義〉へと再編された。しかし〈自由保守主義〉自体が「一枚岩」ではなく、少なくとも、フリードリヒ・ハイネク、ミルトン・フリードマンらの〈新自由主義〉、日米欧委員会報告やダニエル・ベルにみられる〈新保守主義〉、それにフランスのヨーロッパ文明研究センターなどにみられる〈新右翼〉の、三つの種差的で相互の矛盾もはらんだ源泉をもつ

それらの複合であるとともに、それぞれの要素における再定義を含んでいる。例えば、〈新自由主義〉は、かつての〈自由民主主義〉の審問から「個人的自由」「経済的自由」を「政治的自由」と切りはなして市場的に純化し、「経済的自由も民主主義もない全体主義レジーム」は拒否するが「民主主義はないが経済的自由は存在する権威主義レジーム」は許容しうるところまで「民主主義」観を変化させた。〈新保守主義〉は、「平等」概念のレベルで、六〇年代の「機会の平等から結果の平等へ」「個人の平等から集団の平等へ」のシフトを「民主主義の統治不可能性」過剰」「荷重超過」を根拠に逆転させ「社会的平等・正義」の理念を捨てて、「政治的参加」の制限を合理化しようとする。〈新右翼〉にいたると、「差異 \parallel 不平等 \parallel 自由」「平等 \parallel 同一性 \parallel 全体主義」の等式で「平等」理念そのものを攻撃し、テクノクラート支配の必要を公然と主張する。こうして〈自由保守主義〉は、イギリスの「福祉国家」やアメリカでの「貧困との闘争」の時代に「対抗文化」「寛容社会」「集産主義国家」に対して中間層や一般民衆が抱いていた保守的不安・不満の感情を最大限に動員し、反国家主義・反集産主義の「右翼的ポピュリズム」と結びつく。それは、長く「経済主義的・国家主義的社会主义」「左翼ケインズ主義」に執着してきた社会主義勢力への右からの「道

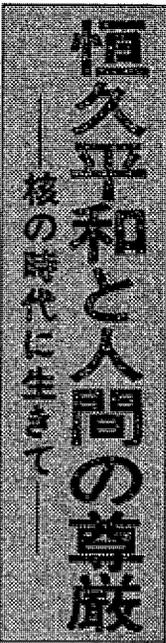
徳的文化的攻勢」であり、フェミニズムや人種差別の審問を接合しうる、「参加」や非国家主義的な「社会生活の民主化」を包摂しうる、「社会主義」と「民主主義」の新たな概念化を要請しているのだ、と。この分節的説明で、「小さな政府」を主張する〈新自由主義〉や〈マネタリズム〉がなにゆえに〈新右翼〉の主張する「強力な国家」と〈接合〉されるのが、またそこには労働者〈階級〉と「人民・民主主義」勢力が衝くべき矛盾もはらまれていることが、明らかになる。

4 むすびに代えて

イギリス・マルクス主義者たちの討論は、まだ継続中である。〈権威主義的ポピュリズム〉概念そのものが、いわ

岩崎允胤著

白石書店



白石選書 18

ば新しい情勢の総括的表象にすぎず、論争的なものである。しかしこうした討論の中から、いくつかの共通の了解が生まれてきていることも、注目すべきであろう。第一は、サッチャーリズム、レーガノミクスに代表される統治の新しいスタイルが、決して一時的なポーズではなく、第二次世界大戦後の資本主義国家の一段階を画する形態的変容(筆者の考えでは「経済成長国家」から「危機管理国家」への突出した表現であり、民主主義勢力・社会主義勢力への本格的で全面的な反撃を意味しているということである。第二に、それが国家の位置する政治的・イデオロギイ的審級・次元でとりわけ攻勢にでており、「ヘゲモニー」言説/審問の問題がこれまで以上に重要になってきていることである。第三に、こうしたレベルでの〈階級闘争〉は、外国人労働者・婦人・青少年・障害者など社会的

現在の日本は、核の脅威、すなわち人間としての生存を根こそぎ否定し、地上を一瞬の地獄と化す核兵器の脅威にさらされている。本書は、「恒久平和と人間の尊厳」という人類の歴史的な課題を、今日のきびしい人類・民族の危機にたいし、対置しようとするものである。 定価1700円+税

平野義太郎
平和の思想
—その歴史的系譜—
■好評発売中 1600円

東京都千代田区神田神保町1-28
☎03(291)7601 振替東京2-16824

政治的弱者の問題、環境・自然保護や反核など人類的でグローバルな運動、総じて「人民・民主主義闘争」との「接合」なしには、社会的辺境に追いやられ孤立してしまいうたろうということである。そして第四に、マルクス主義理論と社会主義像も、深刻な反省を迫られており、新しい問題設定・方法が求められているということであろう。

これらを日本の唯物論者がいかに受けとめるべきか、と問うことは、実は、今日の日本のイデオロギー状況をどのようにとらえ、首相ブレーンやシンクタンクから、随教筆や右派ジャーナリズムを通じてつぎつぎでうごめかされる、支配的な言説／審問といかに対決していくかを考えることと、ほとんど同義なのである。

- (1) 拙稿「西欧マルクス主義の国家論と政治学」、日本政治学会編『現代国家の位相と理論』岩波書店、一九八二年。
- (2) 以下を参照。S. Hall/M. Jacques eds, *The Politics of Thatcherism*, 1983. S. Hall, *Popular-Democratic vs Authoritarian Populism*, in, A. Hunt ed, *Marrism and Democracy*, 1980.
- (3) 小林文児「戦後イギリス政治とサッチャーリズム」、『科学思想』五四号、一九八四年十月。同「サッチャーリズムの現状」、『経済』一九八五年一月、参照。
- (4) E・ホブズボーム「西ヨーロッパ左翼の現状」、『世界政治』六三二号。

(5) N・ブーランツァス『国家、権力、社会主義』（田中／柳内訳）、ユニテ、一九八四年、第四章。

(6) 以下、E. Laclau, *Politics and Ideology in Marxist Theory*, 1977, chap. 4.

(7) B. Jessop/K. Bonnet/S. Bromley/T. Ling, *Authoritarian Populism, Two Nations and Thatcherism*, in, *New Left Review*, No. 147 (Sept./Oct. 1984). なお、「言説／審問」「人民・民主主義闘争」などの含意を含め、B・ジェンソン『資本主義国家』（田口／中谷／加藤／小野訳）、御茶の水書房、一九八三年、をも参照。

(8) C. Mouffe, *Democracy and the New Right*, in *Politics and Power*, No. 4, 1984. なお、新著 E. Laclau/C. Mouffe, *Hegemony and Socialist Strategy*, 1985. 以下、「民権闘争」と「人民闘争」とを区別して論じている。

(かとう) ていせい 一橋大学・政治学